海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS 海外事情

Republic of Cameroon
― カメルーン共和国 ―

カメルーンでの思い出

郡司 武史　GUNJI Takeshi
八千代エンジニヤリング株式会社 / シニアアソシエイト

滞在地ムフー

青年海外協力隊（現JICA海外協力隊）のコミュニティ開発隊員として、2018年6月から2020年4月まで、主に水関係分野を中心にカメルーン共和国のムフー市で活動を行っていました。

ムフーは首都ヤウンデから車で1時間の距離にあります。アフリカで首都から1時間も離れたら立派な田舎で、ムフーも中心部の大通りを除けば、あたり一面森に囲まれた緑がとても豊かなところです。今回はムフーでの生活について思いつくままに記したいと思います。

カメルーンでサッカー

私が地元の草サッカーチームに所属していた時の集合写真があります。カメルーンと言えばサッカーのイメージを持たれる方が多いと思いますが、そのイメージ通り、首都でも地方でも町のいたるところにサッカーグラウンドが設けられており、この写真のように公式試合用のユニフォームをしっかりと準備して活動を行っています。しかし、練習時は用具不足等に悩まされることが多かったです。日本では練習の際に自チームと相手チームを区別するためにビブス（ベスト状の衣服）を着用しますが、ここではビブスすら無かったので、一方のチームがシャツを脱いで、チームの区別を上半身裸かそうでないかで判断していた次第です。

カメルーン人とサッカーをすると特に痛感するのが、とにかく筋骨隆々の人が多い。統計上、カメルーンはGDPも低く、援助対象である貧しい国とみなされますが、そのような区分けがばかばかしくなるくらい、元気でマッチョで素朴な優しい人が多いです。

私は日本でサッカーチームに所属したことは一度もなかったのですが、観戦することは大好きで、カメルーンで生活していた時は一度カメルーン人とサッカーをしてみたいと思っていました。その思いが叶って、地元の草サッカーチームに呼んでもらえ、下手でしたが頻繁に練習に参加するようになりました。

森の奥地にてフィールド活動後の住民と

カメルーンの草サッカーチーム

カメルーン人気質

日本であれば自分だけレベルが低いと、周りに迷惑をかけてしまい「申し訳ない」気持ちになりがちですが、そもそもカメルーン人から散々デリカシーのない行為をされまくっている為、逆にこちらも相手に気を使うこともなく、ミスをしても平気な顔をしてプレーすることが出来たと感じています。

また、日本では相手に気を使って物事を進めることを大変重視しますが、カメルーンに来てしばらくはこちらの心情をくみとってくれず、全く気を遣わないで好き勝手に接してくるカメルーン人に何度もイライラさせられました。しかし面白いことに、慣れてくると逆にこちらも細かい気遣いをする必要がないので、ある意味楽に相手と接せられるという心境に変化していきました。

さらに、これは途上国ではよくあることかと思いますが、カメルーン人もとにかくすぐにお金や物を要求してくる（しかもしつこい）ので、初めはとにかく疲れてしまいます。それもいろいろな理由（恐らく嘘をついてる）をつけてくるので、断るこちらも相応のエネルギーが必要になります。

熱帯熱マラリア

現在世界では新型コロナウイルスが猛威を振るい、歴史に残る出来事となっていますが、そもそもカメルーンには、コロナと同じかそれ以上に怖い病気が存在しています。それはマラリアです。マラリアは蚊に刺されることによって感染するので、なかなか防ぐのが難しいので

写真を撮られるのが大好きな任地で出来た友人たち

幹線道路を外れると多い未舗装の道

す。日本では蚊に刺されることは特に深刻なことでもないですが、カメルーンでは蚊が飛んでいるだけで神経がピリピリします。予防薬を服用しますが、必ず防げるわけではないため安心できません。

マラリアも4種類ほどあるらしいですが、カメルーンのマラリアは最も質の悪い熱帯熱マラリアで、発症して24時間以内に処置をしないとほぼ確実に重症化し、しばしば死に至るという非常に怖い病気です。ただし、新型コロナウイルスと違って世界的な危機にならない決定的な理由の一つが、適切な処置をすればほぼ確実に回復することが出来るという点です。

マラリアの症状は風邪とほぼ同じであるため、高熱が出たらマラリア検査キットの針を指に刺し、その血を少量使って自分で検査を行います。万が一陽性反応がでれば一大事で、この時はかなり緊張します。日本では風邪をひくことは大したことではないですが、カメルーンでは風邪一つでもこのように神経が消耗させられます。

収穫したトマトを見せてくれる農民

しばしば止まるライフライン

病気と並んで神経を使うのは、頻発して起きる停電と断水です。電気がないのはまだ何とかなりますが、水がないと皿洗い、シャワー、トイレ等の様々なことに影響があり大変困ります。協力隊員たちは断水に備えて普段から水をバケツにためていますが、その水も使い果たすと、ディズニー映画に出てくるような井戸を使って水をくみ上げます。

停電に関しても、果たしていつ復旧するのか全く見当がつきません。5分後に回復することもあれば、最悪の場合1カ月停電が続くこともあります。夜に料理をしているときに停電で真っ暗になり、小さい非常用電球を灯しながらご飯を食べるのは、何度経験しても気が滅入るものです。

風邪や病気のときに停電や断水が起きた場合はコンビニもないため食事に困ってしまいますが、通常の体調で自炊が出来るならば、ムフーのような田舎でも特に食事に困ることはありません。

食の楽しみ

首都ヤウンデには中華食料品店があり、醤油や味噌、袋ラーメン、オイスターソース、白菜など様々な中華食材をあらかた揃えることが出来ます。またムフーのような小都市でも輸入されたタイ米が売られており、なかなか美味しいです。ムフーの中心部には屋台が集まった露店街があり、ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎ、キャベツ、トマト、オクラなどの野菜もいろいろと手に入ります。ただしキノコ類はムフーで売っていませんでした。

肉類も露店で売られており、ハエがたかっている肉を買うのは最初かなり抵抗がありますが、しっかりと焼いて食べることに注意さえすれば、とても美味しい肉を味わうことができます。カメルーンでは、塊になっている肉から必要な量だけ包丁でぶった切って取り分けてもらうスタイルです。日によって切って渡してくれる部位が違ってくるため、焼肉屋で複数の部位を注文するように、いろいろな肉の種類を楽しむことが出来ます。日本に帰国してからスーパーでパックに入れられた肉を買いましたが、カメルーンでの塊肉での調理になじんでしまったので、全く肉を食べた気になれずとてもがっかりした記憶があります。

魚も意外に美味しい。ムフーは内陸に位置していますが、冷凍での食品輸送網はカメルーンでも整備されているため、焼き魚がカメルーン市中の屋台でも食べられています。ドラム缶を半分に割った七輪に網を置き、炭火で魚を焼きます。もともと刺身やフライは好きでしたが、焼き魚は特にそこまで好きという訳ではありませんでしたが、まさかのカメルーンで焼き魚の良さを教えてもらう形となりました。

観光で立ち寄った海辺近くの魚市場

招待された日本とは全く違うスタイルの結婚式。待ち時間が長いので疲れる

加えて、池でのナマズ養殖も盛んなため、ナマズ料理も楽しむことが出来ます。これは出汁をきかせたスープで煮魚として食べることが多いです。カメルーンで初めてナマズを食べましたが、身も柔らかく、部位によってはぷりぷりした食感も楽しめ、とても美味しかったです。

首都での外食

首都ヤウンデに上京したときの楽しみは、中華料理やイタリア料理、韓国料理、インド料理の店へ行くことです。残念ながら日本料理店は存在しません。特に中華料理は複数店舗が存在し、日本にある高級店舗にも引けを取らないような外装と内装を備えた店もあります。味も、日本でも十分勝負できるくらいに美味しいお店ばかりです。ムフーでの普段の生活ではこのような食事はできませんでしたので、食べたときの感動は日本で外食するよりも大きく感じました。

カメルーンビール

カメルーン人もビールは大好きで、日本では聞いたことがないビールの銘柄が何種類もあります。現地で一緒だった日本人の間でも、自分は「○○ビール派」と派閥が分かれます。日本でビールといえばキンキンに冷えたものが一般的ですが、カメルーンでは冷えたビールより常温のぬるいビールが人気です。冷たいビールも注文は可能ですが、停電のためぬるいビールしか頼めないという事態も往々にして発生します。炎天下の中で活動した後に頼んだビールがしっかり冷えていただけでも、カメルーンではかなりテンションが上がる出来事になります。

カメルーンで得た財産

ここまで思いつくままにいろいろと記してきましたが、約2年間の生活を通した私個人の感想は、注意すべき点さえしっかりと守れば、カメルーンでの生活もそこまで悪くないものだと思いました。日本ではまずあり得ないトラブルや苦労もありましたが、逆にカメルーンだからこそ味わえた思い出や経験もここでは書ききれないぐらいに体験でき、今の自分の貴重な財産となっています。

国際協力を始めとする開発活動によりカメルーンの抱える課題が解決されることを希望する一方で、カメルーンが持っている先進国にはない個性は、誰にも邪魔されずにいつまでも引き継がれていってほしいと願っています。

活動を行ったサマースクールでの子供たち